

# 『悪僧』の復権 ～玄昉・道鏡・隆光

## 西大寺清浄院住職・種智院大学教授の佐伯師

火曜午餐会・2月第2例会は19日12時15分から当部5階大会議室で開催した。講師に西大寺清浄院住職・種智院大学教授の佐伯俊源師を招き、『悪僧』の復権～玄昉・道鏡・隆光』をテーマに語って頂いた。佐伯師は奈良の『三悪僧』について「現代の日本の仏教、特に奈良の仏教や寺院、そして我々の存在を考えると、決してマイナスのレッテルだけを伝えられていくべき存在ではない」と語った。講演要旨は次の通り。

### 玄昉

奈良時代の中頃に活躍された玄昉。日本に法相宗の宗派をもたらせた大恩人であり、玄昉さんが居なければ興福寺は成り立っていない。

若くして中国・唐に国費留学された秀才。帰国後は、聖武天皇や光明皇后に非常に寵愛され、朝廷の中で重きをなし除災招福の役割がいっそう期待された。そして僧正に任じられ内道場の仏事を主宰された。

しかし、玄昉の栄寵が日に盛んで沙門の行に背いて、時の人たちから批判され、平安時代から長らく存在を抹消されていた。ところが鎌倉時代になり興福寺の中で復

権。

興福寺に残っている中世鎌倉室町期の絵巻に、歴代の法相の祖師の中に玄昉が描かれていた。これを元に玄昉の仏像を造られたのが、奈良市にある福智院。これは画期的なことで、玄昉は悪僧だと言われる中、虚心に眺めれば、奈良の仏教の大恩人だと顕彰をするお寺があった。これに賛同する人たちからご浄財を頂いたことで像が出来た。

### 隆光

出身は現在の奈良市佐紀町の河辺家。長谷寺や唐招提寺で修行されたが、後に江戸幕府のおひざ元で活躍。五代将軍綱吉の護持僧と

なり厚い帰依を受け、その権力を背景に仏教の興隆に努めた。

江戸時代、東大寺大仏殿の大修理があった。表だって活躍されたのは公慶上人だが、背後で後押しした隆光が居なければ復興もなかった。唐招提寺、法隆寺、長谷寺、薬師寺、そして西大寺にも関わり、南都の名立たるお寺はこの隆光無しに現在にない。ところがこの方も晩年に政治に深く関わりすぎたため失脚。最終的に政局に巻き込まれ負けたため、「悪僧」のレッテルを張られた。

### 道鏡

道鏡は史料上、政治に関わり排除、抹消されている。しかし、西

大寺の創建とは切っても切れない存在で、道鏡が居なければ西大寺は存在しない。

2年前、大阪府八尾市で東弓削遺跡の発掘調査行われ、称徳女帝と道鏡にゆかりのある由義寺の遺跡、七重塔の基壇が発見された。このことがきっかけとなり、道鏡への関心が集まり八尾を中心に「道鏡を知る会」が結成。一大発願、道鏡の等身大の木彫像の造立を願い出られた。そして彫刻家の藪内佐斗司先生にご快諾を頂き、現在制作中。称徳女帝の1,250年の御遠忌あたる来年の完成を目指している。完成後は、西大寺に奉納され境内に安置されることが決まっている。

### 「悪僧」

僧でありながら戒律を守らない者、武勇に秀でた荒々しい僧、僧兵、荒法師のことを「悪僧」と言われる。また、戒律を守らない破戒僧、濫僧、淫僧、妖僧、怪僧、そして奇僧など、お坊さんのマイナスを論う代名詞のような言葉が山ほどある。つまり歴史上そういったお坊さんがたくさんいたということ。

「戒律」は、出家者たる仏教教団の構成員として遵守すべき集団の規則。『五戒』である「不殺生」「不偷盗」「不邪淫」「不妄語」そして「不飲酒」。これは出家者だけではなく、在家信者の方も努力目標として守るべきもの。

出家とは、世俗社会から出離して聖なる宗教の世界に身を置くことであり、仏教僧侶の本質であり生命線。

玄昉、道鏡、隆光は宗教者として、実力も教学的にも人格的にも素晴らしい方々。ただ共通して、世俗に深く関わり、政治家として振舞っていたことが「悪僧」だと言われてきた。

出家を極めることは素晴らしいことだが、御釈迦さんは世の中を巡り、苦しみの中にいる人々に教えを説き、救ってこられた。つまり積極的に世俗に関わられた。

もちろんバランスは大事だが、世俗から飛び出て培ったものを、もう一度世俗に戻り世のため人のために活躍するお坊さんが、今後求められるのではないかと。そうで

なければ、仏教の存在価値は発揮されないとと思う。

「悪」は否定的な意味のみではなく、力強い、剛腕、強い勢力という意味で、志を貫く意思の強さという面も含む。奈良の「三悪僧」と言われた「玄昉」「道鏡」、そして「隆光」も、最後まで自分の意志を貫き、宗教の理念の基、この世をより飛躍させるために活躍された。

現代の日本の仏教、特に奈良の仏教や寺院、そして我々の存在を考えると、決してマイナスのレッテルだけを伝えられていくべき存在ではない。

今後の仏教を考える上でも、偏見や先入観なく、周りの意見などに流されず、正しく評価できることを目指していきたい。

